

事業の背景・目的

ラムサール条約登録湿地「肥前鹿島干潟」はムツゴロウ等の国内では有明海と八代海のみに生息する希少な生物が生息しているが、赤潮や貧酸素水塊の頻発により干潟環境の悪化が深刻であり、地域の特産物であったアゲマキ（絶滅危惧Ⅰ類（CR+EN））も激減した。これを改善し、「肥前鹿島干潟」を含む鹿島市沿岸の生物多様性を保全するための対策を実施する。

事業の内容

・実績報告書（別紙9-3）を基に、実施した事業結果の概要を簡潔に記載。事業が複数ある場合や、複数年度にわたる場合には、枠囲みを用いるとわかりやすい。

事業① 生き物調査事業

H30.6.9 市民調査（1回目）参加者22名
（大人13名、こども9名）、スタッフ6名
H30.9.15 市民調査（2回目予定だったが、雷雨のため、スタッフ5名だけで沿岸調査）
H30.10.12 市民調査（2回目）地元小学校と合同で行う（こども22名、大人8名、スタッフ6名）



事業② アゲマキ生息環境調査事業

3月ごとに4回定点調査を行い、アゲマキの生息環境を調査した。

事業③ 底質調査事業

干潟の底泥調査により干潟環境を把握し、アゲマキの生息環境を改善するための施策を検討する。

得られた成果

平成29年度より事業を行い、生き物調査・生育環境調査・干潟の底質調査を2年間行った。その結果、生き物市民調査は定着してきたが、まだ底生生物の生息環境改善の策を講じるまでのデータは揃っていない。

特にラムサール条約登録湿地である肥前鹿島干潟付近の底生生物の生息率は非常に厳しく、また、H29、30は気候がまったく違ったため、データの比較も出来なかった。そのため、データ解析の変更も含め、数年間この調査を続け、底生生物の種類・分布と底質環境の関係を解析し、環境保全・改善の方向性を示す。

また、2年間佐賀大学と協議会中心に行ってきたが、次年度は有明海沿岸の大学に共同調査を呼びかけて実施する。